「春はあけぼの」と「春のあけぼの」

――枕草子第一段雑考――

上野辰義

一、はじめに
二、「しののめ」
三、「あさぼらけ」
四、「あけぼの」
五、「春はあけぼの」と和歌

《要　旨》

枕草子第一段の書出し、「春はあけぼの」は、人口に膾炙する文言でありながら、「春」はなぜ「あけぼの」なのか、「あけぼの」は「しののめ」「あさぼらけ」とどう違うのか、「春」と「あけぼの」は何を背後に持って成立しているのか、など、疑問が多々あり、これまでも研究が重ねられてきた。本稿では、「あけぼの」以下の語の用法を整理して、「あけぼの」でなければならぬ事情を考え、「春はあけぼの」の成立に、当時の和歌の動向がどのように関係しているのかを推測した。

一、はじめに

枕草子の第一段というより、枕草子の現存四系統の本文すべてが、原則として「春はあけぼの」という文言で始まり、この書き出しの七音節については、異同がない。もっとも、これ以降は、三巻本・能因本に「春はあけぼの　やうやう白くなりゆく　山際　少し明かりて　紫だちたる雲の細くたなびきたる」とあるのに対して、堺本に、「春は　あけぼのの空はいたく霞みたるに　やうやう白くなりゆく　山の端のすこしづゝ明みて　紫だちたる雲の細くたなびきたるもいとをかし」と、かなりの異同があり、前田本はこの堺本の影響を受けている[1]と見られるが、概して、三巻本・能因本のごとき雑纂本が、堺本・前田本のごとき類纂本に、成立が先行すると考えられることと、「春はあけぼの」を除けば、他の季節は、堺本を含めて、「夏は夜」・「秋は夕暮れ」・「冬はつとめて」と、その季節の叙述の最初の七音節、または五音節で、文が切れているので、その統一性とから、春の場合も、堺本以外の三系統の本文のごとく、「春はあけぼの」の七音節でまず文が切れる形を、もとのものと見ておこう。

そうすると、この書き出しの文は、現代語における「春は、あけぼの！」・「春はあけぼのナノヨネー」の文に相当するものであることは[2]、十分承認できるのだが、その背後にある意味の構造は、渡辺実氏がいわれるように、「をかしき時の程は」という課題の存在を前提として、「春（にて）はあけぼの（なり）」とでも還元すべきものであることを[3]、やはり確認しておくべきである。でないと、この文の凝縮された意味を取り違えることになるし、そのことはさらに、「春」と「あけぼの」の結合の性格をも見誤らせることにつながってくるからである。

ともかく、そのような内容を、清少納言は、わずか七音節で読者に向かって端的に不足なく表現した。それゆえ、この文はこの作品の冒頭として、枕草子を象徴するものになりえているのだが、その内容自体はどのように評価できるのであろうか。例えば、以下の春の項目に、在ってしかるべき「花」がとりあげられていないことの意味とか、「紫だちたる雲」の象徴するものとかの考察も重要なもの[4]なのだが、それらの基盤になっている、「（春は）あけぼの」自体の評価について、などである。

この、「春」と「あけぼの」の組み合わせについても、その背後に典拠となる漢詩文の存在を想定したりする説があるが[5]、ここでは、「あけぼの」ということばにこだわって考えてみたい。というのは、「あけぼの」については、「夜がほのぼのと明けはじめる頃。暁の終わり頃で、朝ぼ

らけに先立つ時間をさすという」（『日本国語大辞典第二版』）という説明がなされたりするが、「あかつき」との関係は、この枕草子第一段の春のあけぼのの描写や、当時の文学作品にみえる「あかつき」の描写から、「あかつき」が、夜の明ける前、まだかなり暗い時分を指すのに対して、「あけぼの」は、それに連続して白み、明るくなってきた時分を指すと見られるもの[6]の、これに比べて、「あけぼの」と「あさぼらけ」との関係はいまだ曖昧だからである。例えば、夜の寝覚巻四には、

あけぬるに、御前の御格子一間ばかり参らせて、二ところながら、端にいざりいで給つれば、名にながれたるあけぼのの空かすみわたり、いま開けそむる花の木末ども、似る物なきほどなるに、……、この曙は恋しきことぞ、かへるらむ波よりもしげきや。

朝ぼらけ憂き身かすみにまがひつゝ
いくたび春の花を見つらむ

とあり、「あけぼの」が、ものの姿の見える明るさをもっていることが確認できるのだが、その「あけぼの」において詠まれた歌には「あさぼらけ」が用いられ、さらにその返歌には、「いつとだに憂き身は思ひわかれぬに見しに変らぬ春の明ぼの」と、「あけぼの」が用いられるのである。石田譲二氏は、「あけぼの」と「あさぼらけ」の相違について枕草子や源氏物語の例に基づいて詳細に検討され、「時刻から言へば、『あけぼの』の方が『朝ぼらけ』より早く、明るさから言へば、『あげぼの』の方が暗い。それは空がやうやく明るさを取り戻した頃である」、「『あけぼの』と『朝ぼらけ』の差は、簡単に言へば明るさが違ふといふ事である」と言われたが、一方で、この夜の寝覚の例や、うつほ物語嵯峨院巻の例については、「『あけぼの』と『朝ぼらけ』に使ひ分けがあるやうには見えない」といわれて処置を保留されている[7]。両語の語義の違いは、枕草子や源氏物語に前後するこれらの作品の用例も含めて、用法の相違をも視野にいれつつ、統一的に説明されるべきであろう。この石田氏の論も受けつつ、楠道隆氏は、「『あさぼらけ』には『あけぼの』とちがう部分よりむしろ共通する部分の方が多いように思われる」とされて、「ほぼ同義語として『あけぼの』があらわれ、『あさぼらけ』とならんだとき、『ほの』の語感から『おぼめかしさ』の方に重点が置かれ、のち歌語として定着してゆくにつれて、こんどは『あさぼらけ』に代わるものとして流行して行ったのではあるまいか」と、「あけぼの」について言われ[8]るが、両語の指す時間帯に関しては挙例のように相違が見いだしにくいものの、用法においては、かなりに異なる面があるので、語義の差はやはり想定しうるであろう。

以下、そうした用法の異なりを手がかりに、「あけぼの」と「あさぼらけ」の性格の違いを考えて、そのうえで、清少納言が「春はあけぼの」と選択したことの意味を考えてみたい。

なお、「あけほの」という語は、平安時代中期の訓点資料の訓にも見出せるのだが、まずは、枕草子と同様、ひらがな・女手で書写された和歌・物語・日記などの仮名文学を中心に検討していくことにする。それが、「春はあけぼの」の「あけぼの」と同じ位相の用例を重視するという点でも常道であり、また、それで当面の理解には役立つのである。

二、「しののめ」

ところで、「あけぼの」と「あさぼらけ」の相違について考える前に、この両語とやはり同じような時分を指す語として「しののめ」があるので、先行研究文献が、この語についても併せて常に言及しているように、本稿でも見解を述べておくべきだろう。

この語は、万葉集に見える「しののめ」（巻十一、二四八二・二七六四）との脈絡をたどるべきものだろうが、万葉集の「しののめ」が、シノ（忍・偲）の序になっているのに対して、平安時代に入って、寛平御時后宮歌合以来の和歌に用いられる「しののめ」は、それと異なり、「（しののめの）明く」と用いられるのが基本である。

しののめのほがらほがらとあけゆけば
おのがきぬぎぬなるぞかなしき
（古今集恋三、題しらず　よみ人しらず）

あひ見まく秋たたずともしののめの
明けはてにけりふなでせんかは
（古今和歌六帖一　七日の夜　ひとまろ）

少納言の君、「皆人、今宵は」など言ひて、

時鳥旅寝する夜のしののめは
明けまく惜しきものにぞありける
（うつほ物語藤原の君）

この「明く」とのかかわりを、万葉集において「しののめ（細竹目・小竹之眼）」と類似性のみえる「いなのめ（稲目）」が、「明く」の枕詞となっていること（巻十、二〇二六）を介して、古代の原始的住居の壁に、稲藁や篠を編んで明かり取りに用い、そこから漏れこむ光で夜の明けるのを知ったので、「明く」にかかるようになり、また「しののめ」自体が、夜明けの時分をも指すようになったとする説[9]は魅力的だが、ともあれ、「しののめ」は、「あく」の主語として、明けるものであった。そして時間的には、時点を示す「に」の下接した例を含めて判断すると、

しののめにあかで別れした本をぞ
つゆやわけしと人はとがむる
（後撰集恋三　題しらず　よみ人しらず）

しののめにあけゆくみちもまどはなん
あかでわかるるひとのためには
（陽成院親王二人歌合　あかつきのわかれ）

ほととぎすまちあかしたるしののめに
鳴く一こゑはみにぞしみける
（禖子内親王家歌合夏　郭公暁声　中務）

やはり、夜明けの時分を指しているとみられる。そして、「明く」の主語になっているのだから、夜明けの時分の暗い状態を指していると、正確には見るべきであろう。このことは、「しののめ」が、「明く」の他にも、「見ゆ」や「見る」と意味的に関係していることからもうかがわれる。

たなばたのまれにあふよのしののめの
みえぬばかりぞきりはふらまし
（亭子院殿上人歌合）

あふことはあらぬにあくるしののめも
見はてぬゆめの心ちこそすれ
（賀茂保憲女集　逢ての恋）

これらは、しののめが見えないほどに霧がふったらよいのに、とか、恋人と逢えなかったので（もしかしたらまだ逢えるかと）しののめの明けてくるのを見はてぬほうがいいが、逢えなかった現実においては、思うように最後まで見ることのできなかった夢のような満たされぬここちがする、とかいうように、「しののめ、見ゆ・見る」の関係はすでに単純なものでなくなっているが、「しののめ」は、例えば、さきほどの篠目、あるいは篠芽のような視覚的な実体をそもそも持っていたであろうことが、想像される。[10]だから、「しののめ」は、時間的には夜明けの時分を指していながら、

衣々の濡れて別れししののめぞ
明くる夜ごとに思ひ出らるる
（うつほ物語国譲上）

まきのとをたたくしぐれにしののめは
このはもよはもあけにぞありける
（教長集　冬歌　東山辺同じ題
〈稿者注＝山家時雨〉をよめる）

のごとく、指す時間の差はあるものの、「夜ごと」・「よは」などという同義的な語と共存しえてもいるのであろう。つまり、「しののめ」は、夜明けの時点における薄明の状態というような視覚的実態と深くかかわっているのである。

こうして、「しののめ」は、「あけぼの」や「あさぼらけ」と語義的に近しい。しかし、用法的に大きな相違がある。

その用例がほとんど全て和歌の中に限られることである。私が調べた前期院政期ごろまでの資料では、和歌以外の例は、永縁奈良房歌合の郭公第一番の歌の判詞の中に、歌中の語の引用として「しののめ」が一例みられる他は、源氏物語橋姫巻と堤中納言物語逢坂越えぬ権中納言に各一例ずつ見られるだけである。つまり、「しののめ」は、既にいわれているように、歌語なのである。しかも、橋姫巻の例は、秋の末に宇治を訪れた薫が、偶然琴を合奏する八宮の姫たちを垣間見たことを、十月に入って再度宇治に出向いた薫が思い出しているときのものだが、

明け方近くなりぬらむと思ふほどに、ありししのゝめ思ひいでられて、……、「さきのたびの霧に惑はされ侍りしあけぼのに、いと珍らしき物の音、一声うけたまはりし残りなむ、なか〳〵にいといぶかしう、あかず思う給へらるゝ」など聞こえ給ふ。

とあって、ここで、薫が聞き手である八宮への詞の中で、「あけぼの」の語を用いていながら、自身の心中（あるいは語り手）では「しののめ」を用いているのは、歌語として言い換えているだけなのかもしれないが、その思い出された「しののめ」の場面それ自体においては、薫は、「あなたに通ふべかめる透垣の戸を、少し押しあけて見」ていた。その戸は、「竹の透垣」であると直ぐ前に書いてあった。「しののめ」の実体が想起されてしまう。薫が垣間見ていたことは、宮家側では「宿直人めくをのこ」しか知らない秘密なのだから、薫は八宮に「しののめ」などといえない道理なのである。その垣間見した場面のあとには、時間の経過はあるが、「（薫を）几帳のそばより見れば、あけぼののやう〳〵物の色わかるゝに」、「朝ぼらけ家路も見えずたづねこし槙の尾山は霧こめてけり」というように、「あけぼの」・「あさぼらけ」の語が使われていたのだから、薫は八宮に向かっては、「あけぼの」を用いていればよかったことになる。

このように、源氏物語橋姫巻の例を、歌語である「しののめ」が、理由あって用いられたものと見るならば、歌以外で用いられた「しののめ」の例としては、堤中納言物語逢坂越えぬ権中納言の、「彼はしのゝめより入りゐて整へさせ給ふめり」の例が、ほとんど唯一のものとなる。だが、これも、根合を主催する中宮付きの女房が、会場にきた三位の中将に対して、相手方の中納言は殿方が女性のもとから朝帰りして「しののめの別れ」の歌を詠む、そのしののめの時分から、よりによってこちらにいらしている、との意味合で、この歌語を用いて応対したものとすれば、さほどの異常さもなくなる。

このように、「しののめ」は、この時期、ほぼ完全に歌

語として通用している。しかも、後に述べるように、「あけぼの」や「あさぼらけ」は、類聚名義抄や色葉字類抄などの、院政期の古辞書に訓が見出せるのに、「しののめ」はそれらに見出せないというのも、この語が早くから漢文訓読の世界とも縁を切っていたことをうかがわせるし、また、和歌においても、うつほ物語・源氏物語ごろから、「しののめ」にかかわる新しい表現が目立つようになり、能因歌枕以降の歌学書にも、暁を意味する歌語として持続的に取りあげられるようになるから、この語は、十世紀末頃からは、一層歌語として自覚され、従来の用法を踏まえながらも、自由に表現が工夫されるようになっていったのだと思われる。

こうして、「篠目」の実体も想起されやすく、他の類義語以上に後朝の別れとの関わりが深いのみならず、歌語の性格の強い「しののめ」は、指す内容が、「あけぼの」や「あさぼらけ」と似ているとはいえ、現代文でいえば、「春は、曙！」・「春はあけぼのナノヨネー」に相当するような、散文性・口語性に富む文には、用いられにくかったと思われる。

三、「あさぼらけ」

歌語の性格の強い「しののめ」と同じように、「あさぼらけ」も、歌の中に用いられる例の方が、物語・日記の地の文や会話文、和歌集の詞書などの散文に用いられる例よりも、多い。しかも、和歌では、古今集一例・後撰集一例・古今和歌六帖四例・是則集から為頼集までの私家集では十八例・大和物語一例・うつほ物語二例・落窪物語一例、など、早くから例が見られるのに対し、和歌以外では、枕草子の二例以前では、実方集の三例を同時期のものとすれば、大和物語一例・うつほ物語一例と、数が少なく、拾える時期も少し遅れる。だから、「あさぼらけ」も歌語性が強いのだが、源氏物語では、歌に四例用いられているのに対し、それ以外では、十五例を数えるから、散文性もそれなりにあったと思われる。

以下、前期院政期ごろまでの「あさぼらけ」の用法を、歌とそれ以外とに分けて見てみよう。歌においては、「あさぼらけ」は五音節なので、ほとんど全て、初句か第三句かにそのままの姿で、あるいは、終助詞「かな」を伴って第五句に据えられている。この、初句・第三句・第五句に据えられる以外では、第二句に係結びのかたちで置いたものが、大斎院前の御集に、「花すすきあさぼらけこそこひしけれうちそよめきてわかれつるけさ」と、拾えるのみである。それゆえ、和歌において、「あさぼらけ」の据えられる位置は、初句・第三句・第五句にほぼ限定されている

といってよい。このうち、初句に位置する「あさぼらけ」には、当然連体修飾語がつかないが、第三句に位置するものには、連体修飾語のつかないものと、第二句までの連体修飾語を受けるものとがある。第五句におかれているものは、全て連体修飾語を受け、拾えた範囲では、千頴集の「としをへてあれゆくやどのにはくさにいとどうづらのなくあさぼらけ」以外は全て、「(連体修飾語)あさぼらけかな」の形で、いずれも山田孝雄博士の言う感動の喚体の句を構成している。

それで、和歌においても、この形式の違いにより、性格をみてみると、直ぐに気づくことは、連体修飾語を受けず、初句・第三句にそのままの姿で用いられた場合は、時をあらわす名詞が多くそうであるように、時点を示す「に」などを伴わずに、そのままで時点を示していることである。

あさぼらけありあけの月と見るまでに
よしののさとにふれるしらゆき
(古今集　冬　坂上これのり)

あさぼらけしたゆく水はあさけれど
深くぞ花の色は見えける(後撰集　春下　貫之)

世の中をなににたとえんあさぼらけ
こぎ行く舟のあとのしらなみ
(古今和歌六帖三　ふね)

ゆふざれもさらにまたれずあさぼらけ
おきゆくみちのつゆとけぬべし
(陽成院親王二人歌合　あかつきのわかれ)

つまり、「あさぼらけ」は、以下の四句、あるいは二句などが構築する事態の成立する時間的場を表示しているのである。このことは、和歌以外の例を見れば、わかりやすい。

あさぼらけに霧たちわたれりけり。
(大和物語二十八段)

御前の一本菊、いと高く厳しく、移ろひて、朝ぼらけに、めでたく厳しう見ゆるに、露に濡れたるを押し折りて、
(うつほ物語嵯峨の院)

そのひとと、なかのたいのあらはなるにゐあかして、あさぼらけにつまどをおしあけたるに、
(実方集)

これらでは、「に」を伴って一定の時分を指している。そして、その時分が、「ゆふざれ」(陽成院親王二人歌合)との対比や、「ゐあかして」(実方集)迎えるころであることから、夜明け後で、また、後に示す千頴集に、「春ひさす」とあることから、日の出ごろまでも指すものであることが知られよう。このように、「あさぼらけ」が、和歌においては「に」を伴わず、時分を表示する文の成分になっているのは、初句・第三句という五音の位置に、五音節の「あさぼらけ」が据えられているからと、まずは考えてお

いてよいだろう。

さらに、ここで、「しののめ」と比較して気づくことは、「しののめ」にみられた、「しののめ　明く」のような、自身が主語や客語となるような、動詞との意味関係を、「あさぼらけ」には見出せないことである。このことは、「しののめ」自身が、（「篠目」などという実体を想起しつつ）薄明の状況というような、ある実態を内包していた語であったのに対して、「あさぼらけ」は、そうした実態をもたず、ほぼ純粋に、夜明け後から日の差すころまでの時分を指す語になっているのだろうことを思わせる。

もっとも、源氏物語常夏巻には、

いとあてにすみたるものの、なつかしきさま添ひて、面白き梅の花の開けさしたる朝ぼらけ覚えて、残り多かりげにほゝゑみ給へるぞ、人に異なりける、

という、「覚ゆ」の対象語となる例があり、「あさぼらけ」になんらかの内実のあることがうかがわれるが、これは、「あさぼらけ」自体というよりも、「……面白き梅の花の開けさしたる」とある、それまでの連体修飾語によってもたらされたものと見られる。散文における例のみならず、和歌においても、連体修飾語を受けて第三句に位置しているものや、基本的に「かな」を下接させて、かつ連体修飾語を受ける第五句に位置するものは、皆そうである。連体修飾語によって、「あさぼらけ」の内包するものが豊かになっているのである。

鶯のねのいたくなきつる朝ぼらけ
池はこほりにとぢてけらしも
（兼盛集　十一月こほり池にあり）

春ひさすきしのさざなみいろふかく
みえのみわたるあさぼらけかな　（千頴集　春）

だから、基本的に意味的内包性を低め、ほぼ純粋に時分を指す語になっているとみられる「あさぼらけ」が、連体修飾語を受けることによって、提示語となったり、取り立てられた主題に対する述語となったりすることが、できるのである。

おとにきくあさかのぬまのあさぼらけ、
たえぬけぶりは名のみなりけり。
（元真集　〈障子絵の歌〉）

さびしさは、猶住吉の朝ぼらけ（ナリ）。
松やはかすむ、難波江の春。　（玄玉和歌集二）

このように、「あさぼらけ」は、連体修飾語を受けることで、意味的内包性を豊かにすることはできるものの、基本的には「しののめ」と比べて、ほぼ純粋に時分を指す語になっているとみられる。このことは、和歌において、その使用が先に見たように、かなり固定して限定的であるこ

と、また、石田譲二氏が、源氏物語の用例を評して、「朝ぼらけの鳥のさへづり」（胡蝶）・「ほのぼのと明けゆく朝ぼらけ、霞の間より見えたる花の色々、なほ春に心とまりぬべくにほひわたりて、百千鳥のさへづりも笛の音に劣らぬ心地して」（御法）等において、「『百千鳥のさへづり』『鳥のさへづり』などと、取合せからいつて表現がかなり類型化してゐる」[11]といわれたことと、つながっているだろう。こうした用法の固定化の中で、語が本来内包していたものも、枯渇してきて、「あさぼらけ」は、ほぼ単純に時分をあらわす語になっていったのだと思われる。

このようなことを考えてみるときに、「春はあさぼらけ」八音節、という言い方が適切であるか否かは、他の三季の行文の頭にある、「夏は夜」五音節・「秋は夕暮れ」七音節・「冬はつとめて」七音節、との調和の問題もあるが、「しののめ」の場合と同様に、書き出し文の散文生・口語性との関わり、また逆に、春の行文中にみえる項目が、類纂本系に見える「空はいたく霞みたるに」以外、和歌の伝統に基づくものをみいだしにくい、といわれている点とに、関わらせてみる必要があるだろう。それらの点からは、「あさぼらけ」に、積極的な意味を見出せない。

四、「あけぼの」

「あさぼらけ」の例が、散文におけるよりも和歌において、より多く、しかも、より早くから見出だせたのとは、逆に、「あけぼの」の例は、枕草子ごろまでに、和歌において、順集双六盤歌・千頴集・実方集各一例と、見られるのに対し、散文においては、朝忠集・増基集の詞書各一例、蜻蛉日記一例、うつほ物語3例、実方集詞書一例、枕草子一例、と拾え、散文における例の方が、やや早い時期から見られ、数も多い。このことは、「あさぼらけ」に比べて、「『あけぼの』はまったくの新語」[12]という楠氏のことばにもつながるのだが、それはともかく、さらに、「あさぼらけ」との違いで目立つことは、「しののめ」が「明く」の主語となって、視覚的な実態を保存していたように、「あけぼの」も、視覚性をもっていたらしいことである。[13]

夜は明けぬ。……。（兼家への手紙を）苔ついたる松の枝に付けてものす。あけぼのをみれば、霧か雲かと見ゆる物立ち渡りて、あはれに心すごし。

（蜻蛉日記中巻、天禄二年六月）

この蜻蛉日記の例では、連体修飾語をもたない「あけぼの」が、「見る」という動作の客語になっている。「あけぼの」が、夜明け後の光景などというような、見られる実態

を内包しているということである。このことはさらに、連体修飾語を伴うものだが、同類例が多く拾えることからも、補強できる。

野の宮のあはれなりしあけぼのも、みな聞え出で給ひてけり。（源氏物語賢木）

昔の御事ども、かの野の宮にたちわづらひし曙などを、聞え出で給ふ。（源氏物語薄雲）

さくらさくよしののやまのあけぼのを
しらくもとのみおもひけるかな（江帥集）

むしあけのせとのあけぼの見る時は
宮このことぞわすられにける（忠盛集）

あら玉の年立ちかへりぬれば、風の音やはらかに、日のけしきもうららかなるに、松の扉の曙をながむれば、谷の鶯時しりがほに、外面の竹に声をならはすを聞くにつけても、（歌仙落書　序）

これらは、連体修飾語に、いつ、どこの「あけぼの」であるかが限定され、現代語でいうなら、「（あの時・所の夜明け）のできごと・風景」とでもいうような具体的な内容を、「あけぼの」自体が内包しており、それが、「聞え出づ」・「おもふ」・「見る」・「ながむ」という動作の向かうところとなっているわけである。この点、同じく「あさぼらけ」が、連体修飾語によってその内包性を豊かにするといっても、せいぜい、源氏物語常夏巻に見えた、「面白き梅の花の開けさしたる朝ぼらけ覚えて」のごとき、「おぼゆ」の対象語どまりで、「あさぼらけ」自体の内包するものも、「（面白き梅の花の開けさしたる朝ぼらけ）のさま（覚えて）」程度の曖昧な様相のものであり、その意味の実体は、「朝ぼらけに面白き梅の花の開けさしたる（さま）」という具合に、修飾句の内容とほとんど変らず、自身はその内容が成立している夜明けの時分を示しているのと、同じではない。「あけぼの」は、夜明け後の薄明の時分を指しながら、その時分の具体的な状況を、「野の宮のあはれなりし」・「虫明（むしあけ）の瀬戸（せと）の」・「松の扉の（開ケテ）」といった、修飾語句自体の内容を越えて、語としても指示しうる力をもっているのである。

ちなみに、「あさぼらけ」の、連体修飾されて豊かになった内包の曖昧さの例を補足しておくなら、「かな」を伴って感動の喚体の句を構成している場合も、

あけぬればくるるものとはしりながら
なほうらめしきあさぼらけかな（後拾遺集恋二）

しろたへのつるのうはげにおくしもの
まぎれてみゆるあさぼらけかな（賀茂保憲女集）

前者は、後朝の別れを強いる「あさぼらけ」がうらめしいという、情緒的なものが主で、「あさぼらけ」自体は、男

女に別れを強いる時間というおのれの付随的な属性を顕在化させるだけであり、後者も、「あさぼらけ」の時点に展開している、「しろたへのつるのうはげにおくしものまぎれてみゆる」という事態は具体的でありながら、「あさぼらけ」自体は、その具体的事態の成立を可能にしているおのれの薄明性を強調しているだけである。第三章における元真集や玄玉和歌集の例も、「たえぬけぶり」は「あさかのぬま」に関わっているし（古今和歌六帖一六八四）、「住吉の朝ぼらけ」の具体的な風景も、「住吉に霞たち渡れりける」「月次の御屏風」（詞書）の絵の表現に依存していて、同様である。「あけぼの」の場合のような、新たな内包性を獲得していない。

このことは、「あけぼの」・「あさぼらけ」の訓の付けられている、古辞書の漢語の意味からもうかがえる。どちらの語も、夜明けの時分を意味する「淩晨」（類聚名義抄〈アサボラケ〉・色葉字類抄〈アケボノ・アサボラケ〉・「平旦」（色葉字類抄〈アケボノ〉）などの訓にみられるのだが、「あけぼの」の場合は、さらに、朝日のかがやきはじめる様子をあらわす「曨」（類聚名義抄仏中）・「曈」（類聚名義抄仏中）の訓にも用いられているのである。（漢語大詞典に、「曨曨」には「微明貌」、「曈曈」には「①日初出漸明貌。②明亮貌。」という説明が付されている。ちなみに、「淩晨」には「天快亮的時候；清晨。」、「平旦」には「①清晨。②平日、平時。③古代十二時之一。相当于后来的寅時。」と説明がある。）

こうして、「あけぼの」は、夜明けの時分を指しながら、同時にその時分の様子・状況をも指すことのできる語であったと見られる。とすると、『日本国語大辞典第二版』の「あさぼらけ」の項の語誌に、「あけぼの」が、枕草子第一段「春はあけぼの」以降、春との結びつきが多いのに対し、「あさぼらけ」は、「秋冬と結びつくことが多い」と、指摘していることについても、その事情を推測することができるように思う。私の集めえた用例の範囲で、「あけぼの」と「あさぼらけ」の出てくる個所の季節を点検してみたところ、点検の不手際もあろうが、「あけぼの」は、春（正月一日を含む）・夏・秋（紅葉の晩秋を含む）に用いられることがほとんどで、冬は、雪と関わって経信集の詞書に見られるものが最も早かった。（雪との関わりも当初は、春のそれ。）

よもすがら雪ふる夜、物語して、あけぼのにかへり侍りて、つとめて、出羽弁が許より

それ以後、「ゆきのあけぼの」という言い方が拾えるようになる。

また、逆に、「あさぼらけ」は、古今集の是則歌をはじ

め、冬・秋（七月を含む）・春（晩春・藤を含む）が多く、夏の例（常夏を含む）は、判断に迷うものもあるが、四、五個で、枕草子「七月ばかり、いみじう暑ければ」の段に、「朝ぼらけのいみじう霧り立ちたるに」とあるのを、秋に入れるならば、源氏物語葵巻に、「うちとけぬ朝ぼらけに出で給ふ御さまのをかしきにも、なほふり離れなむ事は、おぼしかへさる」とあるのが、夏の田植時期かと推測されて、早い。つまり、「あけぼの」は、冬と関わりにくく、「あさぼらけ」は、夏と関わりにくく、ともに、一条朝頃以降、冬に関わる「あけぼの」、夏に関わる「あさぼらけ」の例が認められるようになり、この点での差が縮まる、という傾向がある。

このことについては、「あさぼらけ」が、単純に夜明けの時分を示す語、「あけぼの」が、それと同時に、その時分の様子・状況をも指すことのできる視覚的な語であった、ということを考えると、多少理解する道も開けてくる。当時の人々は、徹夜をすることも多いものの、鶏鳴から夜明けを一つの基準として、起きるとか、帰るとか、訪れるとか、仕事をはじめるとか、その行動を整理していたから、夜明け前後の環境の変化には敏感であったと思われるが、その夜明けの時刻自体は、定時法が基準であった当時においては、季節の推移とともに変動し、また、その原因である太陽の運行も変化するので、夜明けの時分の時刻・太陽の明るさ・その道筋、居室内外の状況は、一年を通して一定でなかった。それゆえ、夜が長く昼が短い冬は、人々は、夜明け以前から行動の具体的な整理、活動をしはじめ、黎明自体に対する視覚的印象は、他の季節に比較して、冬に関しては弱かったのではないだろうか。冬はすぐに（暗いうちに）生活気分の上で「つとめて」になる。だから、視覚的印象により強く関わる「あけぼの」は、冬の暁との関わりが薄く、やっと雪という幽光を介することで結びつきがもてることになり、「あさぼらけ」は、夜明け・黎明の時分に、時間的により素直に対応していたから、「あけぼの」の機動しにくい部分を結果的にフォローするという形になった、と推量するのである。（夏は逆。）これには、さらに、「あさぼらけ」は和歌に多く使われ、その用法も自由さを失う傾向にあった、という事情も考慮する必要があるかもしれない。

このように、「あけぼの」の性格を、夜明けの時分の表示性と、その薄明性の実態の保持、「しののめ」や「あさぼらけ」に比べての散文性、といったものとして理解するとき、「春は」、「しののめ」でも「あさぼらけ」でもなく、「あけぼの」であった理由がよく分かるように思う。特に、春に関する以下の行文では、「やうやう白くなりゆく山際

少し明かりて紫だちたる雲の細くたなびきたる」と、聴覚的要素でなく、微妙な変化と色彩・明暗をともなう視覚的印象が取り上げられていたから、こうした実態を保持しうる「あけぼの」が、この場合、最も適していたわけである。

五　「春はあけぼの」と和歌

では、清少納言は、なぜ、「をかしき時の程は」という課題に対して、「春」においては、「あけぼの」で指示すべき、夜明け・黎明を選んだのだろう。これについては、枕草子の「雲は」の段にみられるような、清少納言自身の美意識・好みの採用を無視することはできないが、そうした新鮮な個性をここに呈示しながらも、読者にそれを受け入れさせてしまうような、当時の貴族社会・女房社会における感覚・趣味・教養との繋がり・接点をも、作者は計算していたのではないだろうか。

そうした点については、冒頭に触れたように、漢詩文に典拠を求めることなどが、一つの試みになるわけだが、「春はあけぼの」ということばに注意すると、すぐに想起されるのは、「春のあけぼの」という語句である。この語句は枕草子の「春はあけぼの」と、時期的に接して見出すことができる。

女君に、「女御の秋に心を寄せ給へりしもあはれに、君の、春の曙に心しめ給へるもことわりにこそあれ。……」　（源氏物語薄雲）

気高く清らに、さと匂ふ心地して、春の曙の霞の間より、面白き樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。　（源氏物語野分）

袖ふれし人こそ見えね花の香の
　それかとにほふ春のあけぼの　（源氏物語手習）

恋しさも秋のゆふべにおとらぬは
　霞たなびく春のあけぼの　（和泉式部続集）

中将、中務、秋の寝覚めのあはれ、こと古めかしう、改めて定むるに、中将、春のあけぼのなむ、まさると、あらがひてのころ　（大斎院御集）

花盛り春のみ山のあけぼのに思ひ忘るな秋の夕暮れ
　（後拾遺集雑五　源為善）

これらの前後関係は、枕草子、源氏物語、源為善歌の順はほぼ認められるが、大斎院御集や和泉式部続集との相互の前後関係は明瞭でない。一部には、これらが、枕草子の「春はあけぼの」の影響で全て発生したとする見方もある。当時の女房が、集団や個人間で相互に交流を持っていたことは十分認められ、清少納言自身についても、和泉式部・赤染衛門との交渉が確認され、紫式部も清少納言の存在を意識しているから、清少納言が執筆した枕草子の冒頭「春

はあけぼの」の語句の存在は、恐らく間をおかず、彼女らの知るところとなったであろうが、かといって、「春のあけぼの」が、枕草子の「春はあけぼの」の影響を受けて成立した、とするにはいくつか問題がある。

一つは、「春のあけぼの」が、枕草子の「春はあけぼの」の影響でできたとすると、ほぼきびすを接して、「春のあけぼの」の語句が、源氏物語三例、和泉式部続集、大斎院御集、源為善歌と集中して見いだせるのは、一般的な文献の伝来のありようから推すと、かなりの影響力を「春はあけぼの」の語句に想定しないと、理解できないということ。

また、かなりの影響力があったとするには、枕草子では、「夏は夜」・「冬はつとめて」ともいっているのに、右の諸例では、これらは見えず、秋についても、単なる「秋」、「秋のゆふべ」、「秋の寝覚めのあはれ」（続く和歌には「秋のあはれ」と出る）とあって、「秋の夕暮れ」とあるのは、源為善歌のみだが、そこでは逆に、「春のあけぼの」が、「春のみ山のあけぼの」になってしまっているなど、整合性にかけること。

さらに、源氏物語の大部さもあるが、右に挙げた三例の「春のあけぼの」の他にも、源氏物語には、同じような表現があって、源氏物語の方が、「春のあけぼの」については熱心な印象を与えること。枕草子の影響を受けたとするには、源氏物語作者の主体性が疑われかねない。

御方々いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に、春の錦たち出でにける霞のうちかと見渡さる。

（源氏物語初音）

また、「あけぼの」から、「あさぼらけ」に目を広げるなら、春と「あさぼらけ」との取合せが、枕草子に拾えて、清少納言の「春はあけぼの」に対する思い入れが疑われること。

（橘の）花の中より黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露に濡れたる朝ぼらけの桜におとらず。

（枕草子「木の花は」）

以上のように、「春のあけぼの」が、枕草子の「春はあけぼの」の影響を受けて成立した、とする見解には、素直に従えない。

これらの疑問を総合的に解釈する道は、枕草子や源氏物語が成立していた頃、具体的には一条朝の後宮や斎院御所を中心に、春の黎明の情趣と、夕べを核にした秋の情趣との優劣論争が盛んに行われていたという現象を想定することである。（先の「大斎院御集」の例に、「こと古めかしう、改めて定むるに」とある。）春秋の優劣論争自体は、源氏物語薄雲巻にも、論争の当事者である光源氏によって、

「春の花の林、秋の野の盛りをとり〳〵に人あらそひ侍りける」と取り沙汰され、更級日記では、作者と源資通による評定で、彼は春秋のみならず、冬にも言及しているから、少人数での論争も盛んに行われ、冬やあるいは夏にも、批評の矛先は向いただろう。春秋の優劣論争に関しては、一条朝以前では、古今集仮名序の「いにしへの世世のみかど春の花のあした秋の月の夜ごとにさぶらふ人人をめして」を経由しつつ、論春秋歌合・宰相中将君達春秋歌合などの書が伝わっている。特に後者では、「秋の野の夕暮れ」や、同じく秋だが、「ほのぼの明くるあかつきの空のけしき」も、取り上げられていて、興味深い。一条朝期には、先の諸例の他にも、拾遺和歌集雑下巻頭歌群、源氏物語朝顔・少女・胡蝶の巻々に、言及が見える。論争は、春秋が中心だが、四季絵や月次屏風の歌、古今集以来の四季歌の展開で、四季における情趣ある時分への感性も磨かれていっただろう。好忠集の序には、「はなちる　はるのあした　この葉のおつる　秋のゆふべ　月のあきらけき　夏の夜　かぜのさびしき　冬の暁まで」といった四季の各の時分の情趣への言及もみられる。枕草子の「春はあけぼの」は、こうした春秋・四季論争を背景に成立したのだと思う。「をかしき時の程は」という、想定される「春はあけぼの」の課題の背景は、こう解することで具体性をおびてくる。

ただ、その春の「をかしき時の程」を、「あけぼの」に代表される夜明け・黎明の時分に求めたのには、さらに理由があろう。清麗にして余情性のある和歌を指向する当時の歌論的状況である。清少納言が枕草子を執筆している頃、藤原公任は、如意宝集を選定し、それは、後の拾遺抄の母胎となり、さらに拾遺和歌集へと整備されていったが、その「集」の春の冒頭、すなわち「集」自体の冒頭三首は、次のようである。

春立つといふばかりにやみ吉野の
山も霞みてけさは見ゆらむ　　壬生忠岑

春がすみたてるを見れば新玉の
年は山より越ゆるなりけり　　紀文幹

昨日こそ年は暮れしか春霞
かすがの山にはや立ちにけり　　山部赤人

冒頭歌は、公任が九品和歌で、「上品上　是は詞たへにして余りの心さへあるなり」の歌に配した、二首の一つ。上品上の他のひとつは、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく船をしぞ思ふ」である。後者は秋の、冒頭歌は立春の日の、いずれも朝の朦朧とした風情をしっとりと詠みあげている。文幹・赤人の歌も、霞み立つ新春の朝の清新な美しさを、前夜からの時間の経過を含めつつ詠んだ点は共通している。しかもいずれも、微妙な光の明るさを湛え

ている。このような春の湿り気を帯びた朝の朦朧とした風情は、当時の貴族社会で汎く求められたものなのだろう。さきほどの「春はあけぼの」ならぬ、「春のあけぼの」「(春の)あさぼらけ」の例に通じている。つまり、枕草子や源氏物語の成立してくる一条朝ごろにおいて、公任によりリードされていた余情を求める和歌的趣向の状況と、当時の女房社会、宮廷社会における春秋優劣論争とは響きあっており、それが「春のあけぼの」の内実を作っていたのではないかと思うのである。黎明の視覚的な実態をともなう「あけぼの」という語は、こうした情趣を含みこむのに不足はない。

清少納言の枕草子第一段の「春はあけぼの」は、こうした当時の風潮を十分踏まえながら、しかし、内実は違えた。花もなく、霞みもたなびかぬ山際の雲に、漢詩文的な自分の感性を託したのである。

雲は　白き。紫。黒きも、をかし。風吹くをりの雨雲。明け離るるほどの、黒き雲のやうやう消えて、白うなりゆくも、いとをかし。「朝に去る色」とかや、ふみにも作りたなる。月のいと明かき面に、薄き雲、あはれなり。

(枕草子雲は)

だが、「春はあけぼの」は、「春」と「あけぼの」の結合に強い効果を発揮しただろうが、以後どれだけ人々の趣味に、和歌の内容に影響を与えたのだろうか。院政期に数多く詠まれている「春のあけぼの」は、公任や源氏物語などの興趣の上にあるようにみえる。

注

(1)『校本枕冊子』による。ただし、以下、枕草子の引用は、『新版枕草子』(角川文庫)による。なお、他の作品の引用は、次のとおりである。蜻蛉日記・源氏物語は角川文庫本、うつほ物語は『うつほ物語全』、和歌集は新編国歌大観、他は、日本古典文学大系本。

(2) 前者は、野村精一「春は　曙！　攷――枕草子の文体――」『源氏物語文体論序説』において、野村氏が主張されているもの、後者は、柴田武「春はあけぼの。見れどもみえず。」『文芸研究』一二二、平成元年九月に引かれる、山崎賢三氏の文言で、柴田氏も同感されているもの。

(3) 渡辺実「『枕草子』の文体」『国文学』昭和六十三年四月。

(4) 藤本宗利「空白への視点」『むらさき』二一、昭和五十九年七月、日向一雅「枕草子の聖代観の方法」『国語と国文学』平成五年九月。

(5) 上野理「『春曙』考」『文芸と批評』昭和四十三年四月。

(6) 「あかつき」が、夜が明ける(夜が終わる)時点に関わることは、

夜いたうふけぬ。「……」とて、みそかにただいみじう笑ふも、いかでかは知らむ。暁まで言ひ明かして、帰りぬ。

(枕草子二七七段「成信の中将は」)

により、そしてまだかなり暗い時分であることは、

「まだ暗からんに（セヨ）、とこそおほせられつれ。明け過ぎにけり。不便なるわざかな。とくとく」と、倒し取るに、いとをかし。……。「暁に、花盗人あり、と言ふなりつるを、……。誰がしつるぞ。見つや」と、おほせらる。「さもはべらず。まだ暗うて、よくも見えざりつるを、白みたるもののはべりつれば、花を折るにやと、後ろめたさに言ひはべりつるなり」と申す。

（枕草子二六三段「関白殿、二月二十一日に、法興院の積善寺といふ御堂にて」）

などから知られ、「あけぼの」との関係は、

障子を引きたてて、「（中将に）あかつきに御迎へにものせよ」と、宣へば、……。鶏も鳴きぬ。人々起き出でて、……奥の中将も出でて、いと苦しがれば、……。ことと、明かくなれば、障子口まで送り給ふ。……。御なほしなど着給ひて、南の高欄に、しばしうちながめ給ふ。……。簀子の中の程に立てたる、小障子のかみより、ほのかに見え給へる御ありさまを、身にしむばかり思へる、すき心どもあめり。月は有明にて、光をさまれる物から、顔けざやかに見えて、なか〳〵をかしきあけぼのなり。

（源氏物語帚木）

から、「あけぼの」が、「あかつき」に続いて物が見えるほどに、明るくなる頃であることがわかる。

(7) 石田譲二「『あけぼの』と『朝ぼらけ』」『源氏物語論集』。

(8) 楠道隆「『春はあけぼの』の段の解釈と鑑賞」『源氏物語・枕草子研究と資料』。なお、同論文における「あかつき」の説明も、有用なので参照されたい。

(9) 井手至「『しののめ・いなのめ』攷」――原始的住居と『め』――」『万葉』二〇、昭和三十一年七月。

(10) 能宣集に、「（屏風に）八月　あさぼらけたつきりはらのこまのあしをしののめはらひみにもくるかな」、また本院侍従集に、「又男、いでてすなはち　ほのぼのと明行くほどはうちなびきしののめよりぞねはなかれける」、という歌がある。

(11) 注7に同じ。

(12) 注8に同じ。

(13) 「あけぼの」のもつ具体的な視覚性については、既に、小山敦子「源氏物語語彙と解釈」『国文学』昭和三十三年五月、などに言及がある。